

年間第16主日

福音朗読 マルコ 6・30-34

2024.7.21 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
アンドレア・レンボ東京教区補佐司教

本日の福音の物語は、先週の日曜日の福音につながっています。すなわち、マルコによる福音の第6章です。

先週の福音によると、イエスが12人を呼び寄せ、遣わすことにされた。12人はまずイエスに従うために一人ひとり個別に呼び出されました。次に、イエスのそばにいるようにと共同体を形造りました。更に、12人は二人一組になって兄弟姉妹たちのところへ派遣されました。

一つの召し出しに三つのステップがあります。一人ひとりばらばらであった状態から、イエスに従うようになり、次にイエスに従うことから、イエスと一緒にいるステップへと進み、そして、イエスとの交わりから、兄弟姉妹たちみんなのところへ派遣されるステップに達します。そして、本日の出来事が読まれます。

最初の種まきから帰った弟子たちに、イエスはこうおっしゃいます。弟子たちの共同体は何よりもイエスのところに集まることで造られます。誰にとっても、また一人ひとりにとって、イエスは唯一無二の中心になります。宣教の使命はイエスから出発し、イエスを運んで行きます。イエスから切り離されるのではなく、それよりも、他の人々をイエスへと導くのです。イエスの全生涯は御父がどれほど愛してくださる神であるかをあかしするものでした。

イエスに従う者たちにご自分の名によってそのあかしをし続けるように、と呼びかけています。わたしたちはイエスに従う者として神の無条件の愛の目に見えるしるしとなるようにこの世に遣わされたのではないのでしょうか。

さて、皆さんは本日堅信の秘跡を受けるためにごミサに与っています。皆さんとご一緒にこのミサを通して、聖霊が皆さんの人生の中でイエス・キリストの福音に「はい」と答えるすべての人々の中で実現した偉大なことを知り、考えていきたいと思えます。

堅信の秘跡は、洗礼の秘跡を確固となるものとし、皆さんの上に聖霊が豊かに注がれます。人生の歩みの中でイエスの忠実で勇敢なあかし人となるよう助けてくれるその偉大な賜物を、本日皆さん自身が感謝をもって受け入れることができます。

キリスト教徒として皆さんを育て、福音に生き、共同体の活動的な一員であることを可能にしてくださる聖霊の賜物は、実際に素晴らしいことです。

ここで、旧約聖書がそしてイエスが教える聖霊の七つの賜物を思い起こしてみたいと思います。知恵、理解、判断、勇気、神を知る恵み、神を愛する、畏れ。この七つの賜物の中で四つを説明させていただきたいと思います。

第二の賜物は「理解」です。この恵みによって、皆さんは神のみことばの深さと信仰の真理を理解できるようになります。

第三の賜物は「判断」です。この賜物は、あなたたち一人ひとりの人生における神のご計画を発見できるよう皆さんを導きます。

第四の賜物は「勇気」です。この賜物は、悪の誘惑に打ち勝ち、たとえ犠牲が必要なときでも常に善を行うことを助けてくれます。

第七の賜物は「神への畏れ」の賜物です。これは恐怖のことではありません。ここで言われる畏れは、神に対する深い尊敬であり、神を敬う心です。

聖書では、神様は愛であると定義されています。それは今の全世界の社会においてどこに愛として神様が生きて存在しているのでしょうか。

現在の世界を見渡すと、子どもたちが戦争やテロ、病気、飢餓の犠牲となっています。罪のない人々を死が襲っています。このような苦しみ、悪、不正、死は、わたしたちの信仰を試しているのではないのでしょうか。こうした社会の中で洗礼を受けて、堅信を受けて生きることはどういうことでしょうか。

第二次世界大戦が終わって随分経った1990年代に、ナチスの強制収容所に入れられ、20代で亡くなったユダヤ人女性ベッティ・ヒベスの日記が見つかりました。その日記に彼女は「この世界から神様が追い出されている」と表現しています。暴力、民族主義、ナショナリズムという恐ろしい力で神様が追い出され、愛である神様は、愛のない世界で居場所を失ってしまったのです。それでも彼女は「自分自身が神様の居場所になる、自分の心の中に愛を育てていく」と記しています。

堅信を受ける人たちが与えられる役割、心の中に刻みつけなければならないことは、この世界の中で自分自身が神様の居場所となっていくという考え方です。

親や子ども、お年寄り、職場の仲間に優しい心を示し、人を憎まず、ゆるし続ける細やかな生き方の中に神様は示されるのです。